

成功体験から未知への挑戦へ

河野善彦

これまで自分のかわかって来た事は一体何だったのかと時々振り返ってみることがあるのは年齢のなせる業だろうか。大学を卒業するにあたって官僚もビジネスマンも気が向かず、そうかといって大学に残るのも思い付きが悪かった。海外経済協力基金(OECF)で働くようになったのはそういう中であつた。なんとなく面白そうだというような漠とした気分からだったように思う。筆者が社会人となつた一九六八年はOECF設立後まだ七年しか経っておらず、韓国・台湾に続く三番目の円借款の対象国としてインドネシアが加わつたばかりという時であつた。その年度末の貸付残高は六七五億円であつたが百力国以上に対して一一兆円程の残高がある現在と比べるとまさに隔世の感がある。

それから四一年が経過した。OECFは国際協力銀行(JBIC)になり、さらにまた新生JICAとなる等の変遷を経験したし、筆者自身も援助機関、民間助成財団、NGOと立場を変えてきたがもつと大きな変化・変容を遂げてきたのはドナー国としての日本の位置付けであり、途上国世界自体の構造変化である。

米・英・仏・独など欧米先進国を見習つていけば後発ドナーとして援助コミュニティの一員となつた日本はその後ODAの額の量的拡大、条件緩和、内容充実、多様化など様々な方面で改善努力をしていった。この間、対象地域の点でも東アジア・東南アジアから南アジア・アフリカ・ラ米へと広がつていき、冷戦後は東欧や旧ソ連邦各国へも及んでいった。筆者がOECFDの開発協力局へ出向中の一九八九年に米国を抜いてトップドナーの地位についたのもこのような文脈の中での出来事であつたが、まさに「坂の上の雲」を目指して歩んでいた時期である。

単に多額のODAを供与したというだけでは必ずしも自慢にたらないが、世界銀行の「東アジアの奇跡」研究でも指摘された如く東アジアや東南アジアの諸国が好調な経済発展の実績を上げたことは事実であり、その多くが日本のODAの主だった対象国でもあつたことは本邦企業による直接投資の効果とあいまつてODAが有効に活用されたことの傍証でもあると考えられる。(ただし、日本と援助対象国の間でいけば相性が良かったということにも留意する必要がある。)

しかし、今日では諸般の事情が大きく変化した。経済大国化した中国、インド、中進国化するアセアン諸国などは逐次援助対象国から卒業していく一方、サブサハラアフリカなどこれまで関係の薄かつた各国・地域に重点が移っていく。民族紛争やガバナンス上の制約など経済問題以前の条件整備が大きい場合が少なくないなど一層困難な障害を克服する必要がある。また、WTO体制下の世界経済は日本を含む一部のアジア諸国の近代化過程とは異なる政策環境をつくつていくという点にも留意しなくてはならない。すなわち、これまでは戦後復興や近代化といった日本自身の経験や知識が何らかの意味で役に立ってきたのに対していけば未体験ゾーンに入つてきたということではなだらうか。

未体験ゾーンに入ったのであればいたずらに過去の体験に固執している訳にはいかず、新しい発想やアプローチにもチャレンジしなくてはならない。政府の専管事項扱いするのではなくて企業セクター・非営利セクター・学界など文字通りオールジャンで知恵と汗を搾つていく他あるまい。

(このよしひこ財団法人オイスカ事務局長席顧問)